慢性咳嗽における環境真菌*Bjerkandera adusta*(ヤケイロタケ)の重要性

石川県済生会金沢病院呼吸器内科　小川晴彦
金沢大学大学院細胞移植学呼吸器内科　藤村政樹
帝京大学大学院医学研究科　槇村浩一

【背景】担子菌(Basidiomycetes:BM)の出現に伴い、喀痰好酸球が増加するアトピー咳嗽(AC)の経験から、我々はBMに着目し、1)アレルギー性気道疾患におけるBMの即時型皮内反応陽性率が健常人より有意に高いこと 2)慢性咳嗽患者の咽頭真菌培養で、BMの検出率が*Candida*に次いで高いこと 3)BMによる難治性ACでは抗真菌薬が有効な症例があることを報告してきた。

【目的と対象】喀痰真菌培養でBMが検出された8名の慢性咳嗽患者の臨床像を明らかにし、分離株を菌種レベルまで同定する。

【結果】症例は20～68歳。男性5名、女性3名。咳嗽に関するガイドラインに基づくと、AC3名、咳喘息3名、診断不能2名であった。検出されたBMは形態学的同定が不能であり、クランプも見いだせなかったが,分離菌株の28SrDNA塩基配列の解析により、全株*Bjerkandera adusta*(以下BJA)であることが判明した。また、全例において抗真菌薬が有効であった。

【結論】20000種以上にのぼるBMのなかで、BJAは慢性咳嗽の原因もしくは増悪因子として重要な環境真菌である可能性が示唆された。